はじめに

志賀直哉旧居には、何年かに一度、見学のために学生を引率する。奈良にゆかりのある作家ということで、志賀直哉の作品は演習授業などでもよく取りあげるし、近年ではオンラインゲームなどの影響から作品よりも前にファンになっている学生もいる様子である。奈良での学外見学といえば古寺名刹が多い中で、近代文学を学ぼうとする学生にとっては人気の見学スポットである。

一昨年であったか、〈コロナ禍〉で学生同士の交流が少なくなってしまった状況を何とかしたいと思い、奈良周辺の散策を企画したことがあった。聖地巡礼よろしく、上司小剣『木像』の興福寺にはじまり、芥川龍之介『龍』の猿沢池、堀辰雄『大和路・信濃路』の奈良ホテル、森鷗外ゆかりの奈良国立博物館・正倉院、泉鏡花『紫障子』の三月堂とめぐって、お昼ご飯には谷崎潤一郎『陰翳礼讃』に登場するからと、ややこじつけながら奈良公園で柿の葉寿司を食べた（野外で距離をとりつつ……）。その後、志賀直哉旧居の食堂スペースをお借りして、一、二年生のため先輩学生との交流会を開催させていただいた。旧居の文化的な雰囲気に包まれて、実に有意義な好い時間であった。

〈コロナ禍〉と言われるような状況がはじまって、もう三年になる。泉鏡花の作品を読むことを仕事にしてはいるが、かなりの潔癖症だった泉鏡花を彷彿するような生活を、まさか自分が送るようになるとは、二〇二〇年がはじまった頃には想像もしていなかったことであった。当初は戸惑うことばかりであったが、そのうち、およそ一〇〇年前のスペイン風邪の時期を人々がどのように過ごしたのか、あらためて文学作品を読み直すこともした。志賀直哉『流行感冒』や、菊池寛『マスク』など、読んでいると思い当たることが多々あって場面々々で唸ってしまう。（研究者がそれでよいのかという問題はさておき、……）

文学作品のなかには、その作品が書かれた時代が反映している。

今年二〇二三年から一〇〇年前の一九二三年は関東大震災の年である。泉鏡花には『露宿』『十六夜』『間引菜』一連の随筆作品があるが、一〇〇年前の震災ももちろん多くの作家が書き残している。その災害のなかで何が起きたか、振り返られることは少ないだろう。しかし、文学作品に触れるとき記憶はありありと蘇る。文学作品を読む意味はこうしたことにあるのかもしれない。

さらに関東大震災から二〇年後、一九四三年は太平洋戦争の時期である。昨年のロシアによるウクライナ侵攻以降、連日のように戦争のニュースを見る。日本の近代文学のなかにも戦場の記憶は残されている。

文学作品を読むことは必ずしも楽しいことではないのかもしれない。

けれども誰かが読まないと、そこに残されたさまざまな言葉は意味を持たない。

そして今もさまざまな作品が書かれていることには意識的でありたいと思う。〈コロナ禍〉だから綴られる記憶もあるはずである。

ところで、二〇二三年の元旦は、ゼミの所属学生からのメールではじまった。「あけましておめでとうございます。卒業研究の添削をお願いしたいです」とのことであった。原稿が添付されている。勤務先では例年一月一〇日前後が卒業研究の提出日で、年末年始はその添削に追われるのが毎年のことである。ここが大詰めと、できるだけたくさんの朱字を書き込む。ここから十日間が勝負である。

このやりとりは変わらない。ありがたいことである。

白樺サロンの会

西尾　元伸